

労働についての原初的覚書

児 嶋 正 男

- 一、はじめに
- 二、労働の必然性と対象化
- 三、労働の組織と手段と熟練
- 四、労働の疎外
- 五、おわりに

一、はじめに

企業における労務管理は、そこで働く従業員の労働能率向上を指向して、さまざまな施策がとられ、その指導原理も時代とともに、家族主義、人間尊重主義、能力主義などと把えかたを変えている。しかし労務管理が人的能力＝労働力の企業による充足統制活用であるかぎり、労働者がそこでの労働に、真に働く喜びを自らのものとするにはきわめて難かしく、概ねの管理施策もそこに立ちはだかる壁の前にしばしば敗退せざるを得ない。こうして今日の経営労働における最も重要な課題は、ますます拡大の様相をみせる労働の疎外とその回復の問題となる。そしてその解決への模索は一つには現象克服の対象療法的対応策、また一つには疎外を生む基本的枠組みの解明よりする克服策が問われる。

ふり振り返れば、戦いに敗れて仕事もなく、ただひたすらに食べることに懸命であらねばならぬとき、人びとはあれ程に無我夢中で精力的に働き、しかもなお僅かな時間を惜しみながら共に語り合い、むさぼり読み、踊り歌いした。誰しも栄養失調気味で目ばかりギョロギョロさせていて、貧しくみすぼらしい形骸をまといながらも、人それぞれに自らの生命力をあらん限り出し切ろうとし、そうして新らしい世界がつくられてゆくことを疑わなかった。あれから二十数年、今や大方の人びとは忽ちの今日炊く米の心配はない。エンゲル系数は上昇しあの頃とは比べるべくもない優雅な生活のなかにいる。だが奇妙なことに、豊かなる生活資料のなかにかねてよりの望みを果して、限りなき生き甲斐追求に充実した暮しの日々を送っているかと問われると、然りと答えることはできない。しかも、かつての苦しい生活のなかには、明日は今日よりもよくなるという願いと確信のもとに働いていたが、今はその楽観はない。働き、稼ぎ出したものによって、ひともしもより豊かになると単純に思い込んでいたのだが、事実はそのとばかりは進んでいない。働くということ、それが人間の歴史のなかでどのような意義もちどのような結果をもたらすものか、わかっているようでちっともわかってはいなかったのである。労働について、ありふれてあるままの一般的な理解を、おそまきながらごく初歩的など

ころから学び進めることとしよう。

二、労働の必然性と労働の対象化

人は誰に教えられるともなく、働かなければ食べてゆかれないことを知っている。われわれは昔の昔から労働することによって自らを生かし育ててきた。何時の頃からそうするようになったかはさだかでないにしても、他の動物と異って、人間は自然のなかにいてただ自然のなすままにまかせているのではなく、自然に働きかけるといふすべを心得果していることにおいて、はじめてきわだって人間であった。

人間もまた他の動物や植物と同じく、自然によって生みなされ、自然のなかに自然そのものとして、自然の一員としてあること疑いない。したがって、そこに人間のもっているもろもろの能力は、人間の生命力、自然的諸力にほかならない。他の動物や植物と異って自らの持つ諸力能を自分の外にきわだって強く押し出し、それによって他の動物や植物とはちがう生き方へと進んでゆくことになったのは何故であろうか。人間が自然によって生みなされ、生き育っているうちに否応なしに作りなされた身体組織、まずはそれによって規定されていることが求められよう¹⁾。

人間は、「自然存在として、しかも生きている自然存在として、人間は一方では自然的な諸力を、生命諸力をそなえており、一つの活動的な自然存在である。これらの力は、人間のなかに諸々の素質、能力として、衝動として実存している。他方では、人間は自然的な肉体的な感性的な対象的な本質として、動物や植物がそうであるように、一つの受苦している [Ieidend]、制約を受け制限されている本質である²⁾。」

そして、この人間は他の生物たちよりも一層にすぐれて高度化された身体組織をもつゆえに、他のどの動物にもみられない力能をもち、また他の動物にもまして一層ふかくかつひろく制約される。

このような人間存在は、人間がそれにもっとも近いけだものと区別される身体的特長に象徴的である。無毛、頭骨大、二足歩行は、人間を人間たらしめる内実をあからさまに外に示すものとみられる。

人間は自然のなかに自然的存在としてありながらも、外なる自然の環境のままにまかせていたのでは生きてゆくことはおぼつかない。けだものの仲間にあつて毛なきものである人間は、暑さ寒さをしのぎ、雨露をいとうためには、身にまとう何物をも自然のままにはさずかっている。地にもぐり草に伏すには、もはや手足は何の用をもなさず、また肩の上のくびれに乗る不均合に巨大な頭は迅速な行動を防げるに役立つのみである。他の動物は自然の中にあつて自然のままに、自然と融けあつて生活しているが人間はそのようにはやってゆけない。既にして人

1) 田中吉六「二種類の生産と唯物史観」、『思想』542 (1969年8月号)、99~102ページ。

2) マルクス、城塚登、田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫、昭和39年、206ページ。

間がまわりの自然より苦悩を受けると感じる時は、苦悩を受ける自然を対象として受けとめ、自己の外部に存するその対象を同時に自らの苦悩を除くものとして、人間諸力を活動せしめて自己の生存を内在的に確証するとともに人間の欲求充足に役立たしめるための働きかけの対象とする。苦悩を感受する人間存在はそれゆえにまた「一つの情熱的〔leidenschaftlich〕な存在である。情熱、激情は、自分の対象にむかってエネルギーに努力をかたむける人間の本質力である³⁾。」

人間は自然から生れた自然存在であるが、それは自分が自然存在として自然に規定されながら、しかも自分の外部に自然をもち、自らのために絶えず外なる自然に働きかけて自らを存在せしめる自然たらしめねばならない、そのような自然存在である。人間は対象をもつ存在であり、したがってまた、その対象は人間を対象的に振舞うととらえられる。

人間は直接の外なる自然によるのみでは生きられない。人間の生存は自然に直接にそのままには立ちゆかないし、生存のための動物的欲望も直接には充たしえない。野の草や生きた野牛がそのままの姿で食欲を充たすことはできない。人間が食べる食物になるには、人間の手によって作りあげられた、料理された食べ物にならねばならず、料理する人間の力能が対象に加えられねばならず、それは人間が自らをそこに対象化したものにほかならない。人間は生きてゆくには衣・食・住などの生活手段を自然から、母なる大地から得なければならず、だが大地は人間が自然のままにいただけているだけでは人間の欲求充足の対象とのみにはならない。人間がより多くそこから欲するものを得ようとすれば、人間は大地に降り立ち、そこを切り拓いて人間のための「土地」としなければならぬ。人間は自らの力を注ぎ植え移して拓かれた「土地」をさらによりよく活動せしめるように働きかけ、そこから生活手段を生みだし、なおより豊かに生活手段を生み出すための手段を整えるべく、対象の手段化を試みつづけねばならない。対象はより間接的になり手段はより大きくその間に重ねられる。

人間はこのような自然存在であるが、人間が対象に働きかける人間的な自然存在であるのは人間が自然的本能的に共同体的群をなして生き、共同体的生活様式の共同的生成のなかにおいてであった。人間が人間として生れ育つためには人は人びととともにあらねばならない。人間は生れ出て独り歩きできるまでには、他の動物とは比べものにならない長い期間がかかる。ほったらかしにされると赤ん坊は母の乳房から乳を吸うことさえなしえない。人間の種は類的生き方によってのみ保たれ、自然のなかに類的人間世界を作り出すことにより、はじめて人間として生きうる⁴⁾。人間は互いに自己を相手に相手に自己を認め合い、他の人びとと共にあることにおいてはじめて自己自身があることを識り、また他の人びとが自己自身にたいしあつてあることを識る。そして他の人びとに自己を見せることにおいて自己の成員としての人間存在を

3) マルクス、前掲書、208ページ。

4) 沖浦和光「マルクスにおける人間の問題」、『講座マルクス主義4人間』日本評論社、昭和45年、41～42ページ。

確証する。

人間は自己の欲求を充すためには、外なる対象に働きかけ、それを加工し変質させて人間のために役立つものとしなければならない。人間のこの対象への働きかけは、対象への自己投入であり、働きかけて変質させられた対象物＝生産物は自己そのものの対象化にほかならない。そしてそれは自分自身のため、また自分とともにある自分以外の人びとのために使われ役立てられるためのものである。

人間は労働によって対象化された自己を、対象化された生産物にみる。人間の対象への働きかけは、そこへの自己顕現である。労働は自然諸力にさらに自己の持つ自然諸力を加えて、自然の稔りのうちに自己を実らせる自己実現の作業である。自分のそして人びとのための自分の目的を実現させるのである。「蜘蛛は織物師の作業に似た作業をおこない、また蜜蜂はその蠟製の窩の建築によって幾多の人間の建築師を赤面させる。だが、最も拙劣な建築師でも最も優秀な蜜蜂よりそもそもから優越している所以は、建築師は窩を蠟で建築する前にすでにそれを自分の頭の中で建築しているということである。労働過程の終りには、その初めに当りすでに労働者の表象のうちに、つまり観念的に、現存していた一の成果が出てくる⁵⁾。」自己が自らの目的を果すためにその諸力能を結集して対象物に立ち向い働きかけること、それは対象物が自己に役立つものとなること、自己の投入を受容することが大きければそれだけ喜びは大きく、人はその労働に、労働の成果に惹きつけられる。労働はこのように人間に特有であり、人間的に行なわれることにおいて、はじめて労働である。人間の労働は単なる生物的な自然的活動ではなく、対象的であり意志的であり、したがってまた自らを律しつつ自らを具現する充実を感じ、自己を他に示す喜びの能動的活動でもある。

対象化された労働は、対象物に移し植えられて個々の生産者の手を離れ、誰にも使いうる独立した生産物になる。おおくの生産物はそれが生産した人から離れ、自由に他の人びとの生活手段となると、はじめて生産者の目的を充すことになる。人はおのれただひとりのためのみ労働し、生産することをしない。

労働の対象化、自己の他者としての物の生産は、同時に他者——他の人びと——のための自己の生産である。人びとと共にある自己は、それぞれの自己を対象化した、つまり人びとが作り出した物を、互いに自己のものとして費消することによって、よりよく生き、活動しうる。対象化された労働すなわち人間の労働によって生み出されたものは、人間の外に独立した形をとり、それを作り出した人間を離れて対立するものとなる。この対立は人間と物との対立関係物と物、人間相互の対立関係、および人びとがそのような関係のなかに生きていることをみいだすものではあるが、そのままにはこの対立が敵対関係をなすものではない。

「対象的世界の実践的な産出、非有機的自然の加工は、人間が意識している類的存在であることの確証である。すなわち人間が、類にたいして、自分自身の本質にたいするようふるま

5) マルクス、長谷部文雄訳『資本論』第1部上、青木書店、330ページ。

い、あるいは自己にたいして、類的存在にたいするようふるまう存在であることの確証である。なるほど、動物もまた生産する。蜂や海狸や蟻などのように、動物は巣や住居をつくる。しかし動物は、ただ自分またはその仔のために直接必要とするものだけしか生産しない。すなわち、動物は一面的に生産する。ところが人間は普遍的に生産する。動物はたんに直接的な肉体的欲求に支配されて生産するだけであるが、他方、人間そのものは肉体的欲求から自由に生産し、しかも肉体的欲求からの自由のなかではじめて真に生産する。すなわち、動物はただ自分自身を生産するだけであるが、他方、人間は全自然を再生産する。動物の生産物は直接その物質的身体に属するが、他方、人間は自分の生産物にたいして自由に立ち向う⁶⁾。」

人間の労働は自己の対象化としてなされるが、それはまた類的自己の類的対象化である。類的生産は類的使用を目指してなされたのであり、自己の他者として生産されたものは使用という、自己自身への復帰作用を営むためのものであるが、それは類的使用によって完うされる。他の動物と同じく食べることは、人間が生きてゆくための生物的必然事であるが、人は人びとと共に食べることに喜びを感じ、共に作り共に食べることは人間的生活の基本をなす。食物は飢えをいやすためのものではあるが、人間は人間的飢えをみたすために食物を作り、食物を口にす。

三、労働の組織・手段・熟練

人間が自然より規定された生来のそれぞれの特徴を生かしての自然への働きかけは、それぞれに分担しうる労働として割り当てられ分業として行なわれる。「分業は一の自然発生的な生産有機体であって⁷⁾」、人間の歴史の発展とともに歴史的に発展する。人間的な生活は分業による富の生産により実現し、分散して個々に行なわれた分業が、多数の労働者を同時に労働させる、協業、さらには分業による協業に組織され、労働の手段は手工的の道具から機械へと発展する。労働のなかでの労働の習熟は、労働の道具の使い方と道具そのものの改良発展としてもたらされる。より使いやすく、より有効な働きをする用具を求める活動は永い時間のあいだ実に除々に発展してきたのであろうが、周知のように人間が鉄を用いることを知ってからはいきなり急激であり、さらにその鉄を自由に切りきざみ、引き延しして用いることができるようになってからの発展は目覚ましい。

より有効で、より高い生産をもたらす労働の方法が求められるには、労働の方法そのものがまた対象として扱われ、それに検討が加えられねばならない。自分の外の対象として扱われるのは、外的な自然的な対象、それへの働きかけによって生じた新たな生産物であるばかりでなく、外なる対象に働きかける自分自身の働きかけそのものもまた対象となる。自分を対

6) マルクス、城塚登・田中吉六訳『経済学、哲学草稿』、岩波文庫、96ページ。

7) マルクス『資本論』前掲書、223ページ。

象化した生産物そのものに、自分をみ、自分の働かたをみ、さらには自分の働き——労働過程そのものを対象として把える。自分の働きを対象として把え、他の人びとの働きを対象として把え相互に比べることもできるようになる。「働きがある」「よく働く」などといういい方は日常茶飯の言葉となり、何時とは知れぬ昔から助け合うこと、結い合うことはわが国の伝統社会に欠くことの出来ぬ労働方法であり、「すけ」とか「ゆい」とかは、特定の労働過程を対象にし一定の方式に従って協業することの共同体内規制であり、今もその習慣は多くの地方に残っている。自然に対する人工度のより高い恒常的作業においては、固定した人びとが特定の道具を用いての組で労働をすることはきわめて自然のことである。それはお互いに相手がどのような労働をしているかを確認しながら自己の労働を進めることによってはじめて相互に助け合うことになる。そのような協業の拡大は、親方・職人の手工業から家内工業、さらに多数の人びとが同一場所で同時に協業する工場への発展を準備する。協業の組織は人間によって形成され統御運営される重要な対象になる。そしてこの多数の人間が協業することによる生産の拡大が目あたりに展開されるとき、人びとはさらなる生産力の増強を求めて労働手段の飛躍的發展を遂げしめる。そして資本制の生産がここにはじまる。

「資本制の生産は、・・・事実上、同じ個別的資本がより多数の労働者を同時に就業させ、したがって労働過程がその範囲を拡大して生産物をより大きい量的規模で提供するばあいに、はじめて始まる。より多数の労働者が同時に同じ空間で（または同じ労働場所でといってもよい）同じ種類の商品の生産のために同じ資本家の指揮のもとで働くということは、歴史的および概念的に資本制の生産の出発点をなす⁸⁾。」労働手段、労働対象が独立して自由に売買される商品になり、やがて人間自身のうちにあつてそこから離れることは如何にしても不可能である属性をもつ労働力をも商品として売買対象とせざるをえない資本制の生産という歴史的に規定された諸関係のもとにおかれることとなる。そしてそこでの人間労働によって強化され巨大化した労働手段は、人間の持つ自然諸力——生理的限界——を超えて人間のための生産拡大を果すためのものであると同時に人間そのものを呑み込んでしまうものとなる。われわれはここにまた、人間が生み出した社会関係とともに、人間の生み出した技術に対して直面せざるを得なくなる。「機械としては、労働手段は、自然諸力による人間力の置換え及び自然科学の意識的応用による経験的熟達⁸⁾の置換えを条件づける物質的実存様式を受けとる。マニユファクチュアにおいては、社会的労働過程の編制は純粹に主体的であり、部分労働者たちの結合である。機械体系において大工業は、労働者が既成の物質的生産条件として見出すまったく客体的な生産有機体を有する。単純協業においては、また分業によって独自化された協業においてさえも、社会化された労働者による個別化された労働者の駆逐はなお多かれ少なかれ偶然的に現象する。機械は、のちに述べる若干の例外はあるが、直接に社会化された・または共同的な・労働

8) マルクス『資本論』前掲書、543ページ。

によってのみ機能する。かくして今や、労働過程の協業的性格が、労働手段そのものの本性によって命ぜられた技術的必然となる⁹⁾」。

労働が自己を対象に働きかけ投じることであり、そこに相対する対象を、さらには写し出された自分自身をみいだし、またそこから人びとの評価をうけるとすれば、労働をする者は、対象から、対象への働きかけの過程から、また共に働きあるいは出来上ったものを使用する人びとから学び、自己の力能を高めてゆく。何よりも一人前の人間であることは、人びとと立ち交って一人前に働けることであらねばならない。人びとが一人前になってゆく過程は労働を通じてであり、一人前の労働ができるようになることへの道程が同時に人間形成の過程である。労働過程における自然への働きかけ育成の手法は人間形成にも同じように用いられるものであり、人びとは労働過程において「仕付」られ「鍛」えられるのであった。教育ということは労働から離れては在り難いと考えられるが、今日のように教育が学校教育に専門化して、一応労働と離れた形態をとる以前には、教育が労働や職業の習得として行なわれるものであることは至極当然のことであった。徒弟修業期間についてのつぎのような記述は、職業教育と後の学校教育が無縁でないことを示すものといえよう。「昔は、全ヨーロッパをつうじて、組合化された職業の大部分のものにおいては、七年というのが徒弟修業の通常の継続期間として確立された年限だったように思われる。このようなすべての団体は、昔はユニヴァーシティとよばれていたのであって、実際それはありとあらゆる団体にふさわしいラテン名である。かじ職のユニヴァーシティ、裁縫職のユニヴァーシティなどというのが、われわれが昔の都会の古い特許状のなかに通例見うける表現である。現在とくに大学とよばれている特殊な団体がはじめて設立された当時、学士という学位を獲得するためにどうしても必要な修学年限が、ずっと昔から団体がつくられたふつうの職業における徒弟修業の年限をまねたものだという事は明白であるように思われる¹⁰⁾。」

まさしく「労働の熟練の形成過程が、人間の自己形成——一人前の人間として成長してゆく過程と不可分に重なっていると考えられていた時代がいまからあまり遠くない時代にあった¹¹⁾。」のであり、現代における雇用のなかでの就業という狭い就職観のなかにも、なおそのような期待が重くかけられているのである。そして、現実の職業生活もまた全くそれを否定し去っているのではない。そこではやはり何程かのデシプリンが要求され形成され、それは人格形成と無縁には行われえない。労働は何よりも人格活動そのものに由来する。労働は人間のもつ諸力能すなわち労働力の人間のための発揮をいうのであり、「吾々が労働力または労働能力と云うのは、人間の身体すなわち生きた人的存在のうちに実存して彼が何らかの種類の使用価値を生産するたびに運用する、肉体的および精神的な諸能力の総計のことである¹²⁾。」特定の

9) マルクス『資本論』前掲書、630ページ。

10) アダム、スミス、大内兵衛、松川七郎訳『諸国民の富』I、岩波書店 241～242ページ。

11) 中岡哲郎「労働と人間」、『講座マルクス主義4、人間』、日本評論社、昭和45年、142ページ。

12) マルクス、長谷部文雄訳『資本論』1、315ページ。

労働能力が高められるには肉体的精神的諸能力が高められねばならず、総合的諸能力のたかまりのなかに優れて特定の労働能力が高度に持続的に発揮されることになる。

熟練というのは、労働者がある労働をとおして伝習獲得した、並の人誰でもがすぐに真似のできない特殊な作業能力であるが、それは、「学校における系統的教育をとおしてあたえられるように理論的ではなく、きわめて経験的なかたよりをおびたものであるが、あきらかに、労働者が労働をとおして獲得してきた対象的世界についての認識なのである。労働の熟練という時、われわれは何よりもまず、そのような対象的世界についての豊かな認識に支えられた労働能力を想起すべきであろう。労働を支える対象的世界についての経験と認識が豊かであればあるほど、それに支えられた技能は、柔軟な対象への適応力と他の領域への転換可能性をもつことになる¹³⁾。」

機械工以前の工業的領域における労働の熟練の二つの特徴は、「そのひとつは、対象的世界の知識と豊富な経験に支えられた多能性であり、もうひとつはその能力の人格的一体制である。別のことばでいえば、その人個人からひきはなすことができない個人的能力ということである¹⁴⁾。」そして、この二つは機械制大工業のかなり発達した段階まで熟練の特徴として保存されていたことに注意が払われねばならないとされるが、まさしくこの二つこそは「労働の熟練」の基本的特質をなすものであろう。さらに加えていえば、多能性とは、労働者自らが自己の労働を管理している態様を示すものであり、労働者自らの意思によって、さまざまな条件に対応しながら、自己の能力を最高に対象に働きかけ、もくろみどおりの作品が製作されるのである。少なくともそこではどのように作り出すかのイニシアティブは労働する者自らもっている。

四、労働の疎外

われわれは、労働が人間的生存の自然的条件であることをみ、それは人間が外なる対象に働きかけて、自己を外に対象化するものであることをみた。労働が対象化されることはまた、もともと類的存在である人間に必須のことであり、人間の類的連関は対象化し物化し、人間が自由に取り扱える形態をとることによって一層高度に人間の生活は人間的発展をとげる。人間が生活するためには、生活手段として物が作り出されねばならず、作り出された物によって生活が営まれるとすれば、物と物との関係によって人間の関係が律せられることになろうが、それは人間が作り出した物が勝手に人間にそむいてそうなるのでも、物が人間を支配するのでもない。「人間の社会的連関が物と物との関係として対象化され、合理的に取り扱いうる形態をとるということは、それ自体としてはいささかも否定さるべきことではない……。なるほどそれは人間の生産物、ないしはその生産諸関係の物化といってもよいものだが、物化とか外化とか

13) 中岡哲郎, 前掲稿, 144ページ。

14) 中岡哲郎, 前掲稿, 145ページ。

いう現象についていえば、私たちはまずつぎのことを確認しておかねばならない。それは、人間の生産活動が、その活動の形態を一定の社会関係に対象化し、そこに物化された構造を生み出すということは、人間の生活活動にとっては必然的なことであり、また爾後の活動の有効な展開のためには欠くことのできないことだということである。外化、物化は、ただちに否定的な意味での疎外を意味しない。そして一般に社会制度という語で表示されるものは、この物化された構造のことである¹⁵⁾。」

人間的生存が自分の産出する生活手段によらねばならないことは人間的自然であり、人間的労働はすでにみたように人間の類的諸力を情熱的活動的に外へ対象化することであって、人間の活動による人間の人的産出、人間的発展の自然的必然的手段である。主体である人間が自己自身を自分の外のものとして客体化し自己の対象とするという、外化・疎外なる概念は、人間に固有な能力がいかにかに発展し、人間的な自然世界を、人間と自然の全自然の再生産として発展せしめるかをみせてくれる。ヘーゲルが精神的労働を自己疎外の行為としてとらえ、そこに人間の自己産出の手段をみたに対して、マルクスは生産的労働を自己外化、自己疎外として把握した。「それは人間の（しかも、フォイエルバッハが発見したとおり、ただ人間だけの）一つの根本的能力を正確に再現する。この根本的能力とはすなわち、主体が、自分に固有なあるものを自分の外へ立て、これを、ある持続的な客体へと転化させ——これは『それ』〔主体〕であると同時に〔非それ〕〔非主体〕であり、したがって新しい主体となる——そして、これにたいして新しい弁証法的諸関連に入りこむ、という主体の能力のことである。主体のこの能力からして、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の成長増大してゆく器官＝機関をなすところの、独特の客体世界が生じるのである¹⁶⁾」。

人間の生産的労働は、類的諸力を生産物として類的な生活手段とし、それは労働の疎外なる行為によって、自己の作り出したものを手放し、自己に疎遠なるものとして他人に手渡すことによりなりたち人間的発展をみる。外化し手放すことと、手放されたものをひとりひとりが個々に勝手に処分することとの相互の必然は、私的所有という規定が入りこみ、私的所有そのものが疎外される。私的所有は価値となる。価値としての私的所有の連関において、交換過程のなかへ労働が組み込まれるには、労働の源泉＝労働能力＝労働力はそれを担う自由な労働者によって売買しうる商品とならねばならず、労働は単に生活のための手段たる生産物を生産するだけでなく、価値を生産する営利労働になる。労働は、労働する者の直接的な生活のためのものであり、彼の自己を確証し自己を強化発展させる過程でもあった。だが労働力の売買交換によって、彼の労働は部分的には営利源となってしまった。「彼の労働の目的と、そしてその労働の現存在とは、いまではちがったものである。生産物は交換価値としては、もはや生産者にた

15) 梅本克己「唯物史観と経済学」、『講座マルクス主義2、科学とイデオロギー』日本評論社、33～34ページ。

16) A, クラレ、藤野渉訳、『マルクスの人間疎外論』岩波書店、6～7ページ。

いするその直接的な関係のために生産されるのではない。そのさい、なるほど一般的労働はより多面的になってゆくけれども、個人的労働はより一面的になってゆく。こうして彼の労働はまったく営利労働のカテゴリーにはいることになり、とどのつまりそれは生産者が彼の生産物をみづから享受するときにも、また労働そのものが彼にとって、彼の自然的諸素質の自己享受および彼の精神的諸目的の実現であるときにも、まったく偶然的で非本質的なものになる¹⁷⁾。」人間の本质である労働は、資本制的生産における賃労働の疎外として顕現する。「労働の実現は、労働者が餓死するにいたるまで現実性を剝奪されるほど、それほど激しい〔労働者の〕現実性剝奪とて現われる。対象化は、労働者が生活上もっとも必要な諸対象だけではなく、労働の諸対象としてもっとも必要なものまでも奪いさられるほど、それほど激しい対象の喪失として現われる。それどころか、労働そのものでさえ、労働者が最大の緊張と不規則きわまる休止とをもってでなければ、我がものとできない対象となる。対象の獲得は、労働者がより多くの対象を生産すればするほど、彼の占有できるものがますます少くなり、そしてますます彼の生産物すなわち資本の支配下におちいっていくほど、それほど激しい疎外として現われる¹⁸⁾。」

五、お わ り に

額に汗して働くことは決して楽しいばかりではないが、またどんな場合にでも必ず苦しいばかりであるのではない。人は働くことによって生き、働くことにおいて人間は人間である。人間の疎外がいわれ、労働の疎外がいわれるが、それはただ集団に親和しなかったり、仕事が面白くなかったりすることをそのままにとらえているのではあるまい。現象の表層にいきなり疎外が問題として取り上げられる割には人びとは疎外の認識がないのではなかろうか。疎外ということ自体、疎外してとりあげてみる必要がある。実は疎外ということ大変稔り多い概念であり、労働は人間の自己疎外の活動にほかならなく、労働によって自己を対象化することによって始めて類的人間の発展があることがみえる。疎外という言葉は、一般には常に否定的に使われながらも真の否定面を見逃している。もちろん自己疎外ということそのものが自己対象化ととらえられるとともに自己喪失化の否定面にとらえられることはいうまでもない。そのようにして矛盾があかさされ発展がとげられるのであろうが、その否定面は資本制的機械制大工業生産が重さなるところに一層大きく生じるとみえた。したがってその否定面をより明らかにするため、対象化による物化が資本制的商品化されないところで肯定的に把えられるだけ把えて労働の疎外の前景を写し出しておこうとしたのであったが、十分に展開させることができたかどうかは甚だ疑わしい。だが労働の疎外の問題は、人間労働の[・]対象化と、対象化による生産物のさらには労働力の[・]商品化を対照することにおいてまずは明らかにせられるべきと考える。

17) クレラ、前掲書 137ページ。

18) マルクス『経済学指学草稿』岩波文庫、87ページ。